●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 23

23rd Letter

熊野三社の松巨嶋伝説

海の神・ポセイドン
湖を人が住める大地に

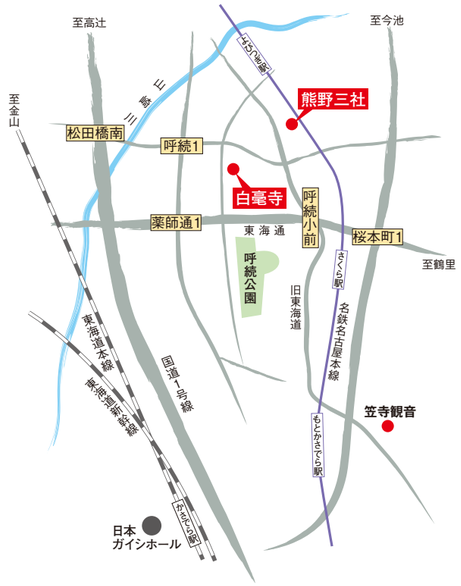
ギリシャ神話で海の神といえば、ポセイドン。海を支配したポセイドンでしたが、陸地の支配権をめぐっても争いをしました。なかでも有名なのが、知恵の神・アテナとの争いです。神々が世界を自分の領地として分け合っていた時、ポセイドンとアテナが希望したのがギリシャのアッティカ地方でした。

互いに譲らない2人に神々はこんな裁定を下します。「人々に有益なものを与えた方にこの地を任せることにしよう」と。ポセイドンは塩水の湧き出る泉を、アテナはオリーブの木を生み出しました。その結果、オリーブの方が有益だと判定され、アテナが勝利。地名もアテナにちなんで「アテネ」と命名されました。

コリントスの領有権をめぐってヘルメスと争ったこともあります。その時は大地ガイアと天空ウラノスの息子・プリアレオスの裁定により、町の高台であるアクロ・コリントスはヘルメスに、その他の地域はポセイドンの領地となりました。

ポセイドンは神々との領地争いのたびに、洪水を起こして土地の住民たちを困らせていましたが、いつも迷惑行為をしていたわけではありません。かつて巨大な湖だったテッサリアを人が住める大地にしたこともあります。大地震を起こして渓谷を作り、湖の水が抜けるようにしたのです。

かつて海だった笠寺周辺が人の住める大地になったのは、もしかしたらポセイドンのおかげかもしれません。実際にこの周辺を散策してみると、思いの外、アップダウンが多いことに気づかされます。地図を片手に地名をたどりながら「あ、この辺はかつて海だったんだ」と確認しつつ、浮舟に揺られながら年魚市潟の絶景を楽しむ自分の姿を想像してみるのも一興です。



かつては海だった笠寺周辺
年魚市潟に浮かぶ松巨嶋

熊野三社は永禄3年（1560年）、山崎城主・佐久間信盛の守護神として祀られたのがはじまりといわれる由緒ある神社です。寛永4年（1627年）にこの地に移されました。ちなみに、本殿の東西に脇宮が二社あることから、三社と呼ばれています。

境内には大楠が幾本も生い茂り、静かなたたずまいを保っています。社務所前にあるのが松巨嶋の手洗い鉢で、表には「松巨嶋」と大書きした文字が深く刻まれています。

▲熊野三社の社務所前にある松巨嶋の手洗い鉢。

その昔、笠寺周辺は年魚市潟と呼ばれる海でした。年魚市潟とは、かつて熱田から鳴海にかけて湾入していた海辺のことで、絶景であったとされています。万葉集にも「桜田へ田鶴鳴き渡る年魚市潟　潮干にけらしたづなき渡る」「年魚市潟潮干にけらし知多の浦に　朝漕ぐ舟も沖に寄る見ゆ」と詠まれています。

白毫寺の境内には、高さ3mにも及ぶ年魚市潟勝景の標柱があります。笠寺台地上に位置する白毫寺境内は、その年魚市潟を展望する絶好の場所とされていたのです。ちなみに、「あゆち」が転じて「あいち」になったといわれていて、年魚市潟は県名発祥の地でもあるのです。

笠寺台地は松の大樹が多く茂る島で、熱田まで舟が出ていました。熱田に向かう時、舟から後ろを振り返ると、島全体がまさに巨大な松に見えたことから「松巨嶋」と呼ばれるようになったといいます。ちなみに、「呼続」という地名も、舟が出る時に「もうすぐ舟がでるぞ」と呼び継いだことから付けられたといわれています。

笠寺周辺には、呼続以外にも今も荒浜町、浜中町、前浜町、塩屋町、元塩町と海にちなんだ地名が多く、その理由もこれで納得できます。

▲白毫寺の境内にある年魚市潟勝景の標柱。

※次回は、円通寺に伝わる火渡り伝説について特集します。お楽しみに。

■ 写真／Kiyoshi K　■ イラスト／Rei
■ 取材・文／Icarus